

【水の作文大賞】

当たり前にありがとう

熊本県 嘉島町立嘉島中学校 一年 橋本 葉奈

「うわ：汚い。」

思わずそう声に出したのは、二〇一六年に起こった熊本地震のときだった。私はそのとき、初めて水道水を汚いと思った。

熊本地震のとき私は四歳だった。それでもはっきりと覚えている。家の蛇口から茶色に濁った水が出てきたのだ。熊本地震が起こった直後はそもそも水が出なかった。食べ物は近くのコンビニで買ったおにぎりやペットボトルの水。しばらくして大量の水とインスタント食品が物資として届けられ、それで生活していた。そしてやっと出た家の水。断水期間は短かったかもしれない。けれど、水が出るようになるのを心待ちにしていた。それなのにひどく濁った水しか出てこない。私は心の中で少しがっかりしていた。「いつもの水はきれいなのに」と。その後、徐々にいつもの水も出るようになり、ごく普通の生活に戻っていった。その時だ。私がかきれいな水が出ることへのありがたみを感じたのは。しかし、世の中には、災害時だけでなく、日常的にきれいで安全な水を使えない人々もいる。

現在、世界人口の約三分の一にあたる、およそ二十二億人が安全に管理された水を使えていない。そのうち一億一五〇〇万人は、湖や河川、用水路などの未処理の地表水を使用している。菌に汚染された水を飲むなどで感染する伝染病で命の危険に直面している人もいる。その水が危険だとわかっていても飲まざるを得ない人々がいるのだ。水不足に悩まされている人も約三十六億人にもなる。この現状から水不足や設備不足などの深刻化が進んでいることがわかる。実際、水不足が原因で紛争が起こる場合もあるそうだ。今の状況が続けば、二〇五〇年には約九十七億人になるとされている世界人口のうち、約半数が水不足にさらされると予測されている。地球上の水資源には限りがあり、飲み水として使用できる水は地球全体の水の〇、〇一%にも満たないと言われている。使

用量が増えれば増えるほど水不足は深刻になっていくのだ。また、排出される工業排水やや生活排水が河川や海、地下水の汚染にもつながっている。さらに、地球温暖化による気候変動や水源破壊も水不足の大きな要因になっている。

では、私たちができることはなんだろう。国土交通省の統計によると、一日一人あたり約三〇〇リットル近くの水が使われているそうだ。日本では、水に困るということはあまり多くはない。だからといって好き勝手に使っていないわけではないだろう。一人一人が水不足の原因を理解し、できることを行動に移すことが大切だ。例えば、私達は生活のあらゆるところで水を使用している。その際、使用を最低限に抑え節水を心がける、洗剤や油などの生活排水を減らす。そして、温暖化の原因となる二酸化炭素の排出を抑えるなど、それぞれの家庭でできることはある。日常の中で少しずつ意識することが水不足対策につながっていくのだ。

私は熊本地震のとき、水が出ないというのは大変なことだと実感した。濁っている水を見たときも汚いと思った。「こんな水使いたくない」と。しかし、水が汚なくてもその水を使うしかない、水不足に苦勞している、そんな人たちがいることを知った。今までも、節水には気をつけているつもりだった。けれど、これからは、水を出しっぱなしにせず節水をする。油ものは水に流さず拭きとることに力を入れていこうと思った。水は津波のように人の命を奪う怖いものもあるが、私たちは水がないと生きられない。水は無くてはならないものなのだ。これらのことを頭に入れながら、水に感謝して過ごしていこう。